

30 リスク管理：政治指導者そして国民は何を知っておくべきか

真渕 勝



京都大学大学院法学研究科教授。2016年4月、立命館大学政策科学部着任予定。趣味は以下のとおり。
映画鑑賞（洋画を忌避してはおりませんが、邦画を愛好しています）、落語（聞くだけです、演じません、枝雀が好きです）、旅行（一人でも行きますし、家族旅行も楽しいです）、カラオケ（サカナクション、セカオワにしばらくはまりました）、ラーメン屋めぐり（最近では、太宰府天満宮の入り口のラーメンがうまかった）

1 研究内容・目標

私の専門は行政学である。しかし、同時に公共政策分析という新しい学問分野にも関心がある。ここ数年はこちらの分野に多くの時間を割いてきた。そこで専門演習では公共政策分析に力点を置こうと思う。とくにリスクマネジメントについて研究する。

「天災は忘れた頃にやってくる」という有名な警句がある。寺田寅彦が昭和9（1934）年に公表した随筆「天災と国防」の文意から生まれたものである。「天災」を「リスク」と置き換えても「なにかしらの真実」を伝えていると考えることができる。なぜならリスクへの身構えは一過性のものに終わることが多いからである。

たしかに、巨大なリスクが発生した直後あるいは数年の間は、各種の対応策を検討し、それらを実施する。政府は復旧・復興そして減災などのために大量の予算を投入し、マスメディアは大量の情報を流し、研究者は大量の書籍・論文を発表する。しかし、時がたてば事件・事故は静かに忘れさられ、対応策もおざなりになる。予算は削減され、マスメディアは年に一度の追悼番組を組み、研究者は次の「旬のテーマ」に関心を移す。そのようなことをわれわれは繰り返してきた。リスクはあくまでも確率として把握されるために現実感に乏しく、影響の大きいリスクは滅多に発生しないために緊迫感が薄いためである。そして、いつ発生するかわからないリスクへの対応策は（かつての地震予知を例外として）、政治家には「票」に結びつかず、官僚には個人としては「昇進」に、組織としては「予算」に結びつかない。まして平均的な市民にあっては日々の生活に明け暮れ、いつ発生するともわからないリスクのことを考えている余裕はない。その結果、過去からの学習が十分に行われない状況が続いてきたのである。

だが、リスク分野を横断すれば様相は一変する。ある年、巨大地震は起こらなくとも、巨大台風は襲ってくるかもしれない。巨大台風からまぬがれても、大雨それに伴う地崩れが町を襲撃することがある。大雨が降らなくとも、感染症はたとえ季節性ではあっても猛威を振るかもしれず、得体の知れないウイルスによる新型の感染症が海外で発生し、日本に侵入する恐れは常にある。このような自然のメカニズムによって生じるリスクが生じなかったとしても、海外での経済危機が日本経済を揺さぶり、人々を不安に陥れるかもしれない。それとはまったく脈絡もなく治安上の危機が発生するかもしれない。

われわれを襲う可能性のあるリスクは、このように一つ一つの分野では何十年に一度、あるいは何百年に一度という発生確率の低いものかもしれない。それゆえに「リスクは忘れた頃にやってくる」という警句には「なにかしらの真実」が含まれている。だが、リスク分野を横断してみれば、何も起こらなかった年を探す方が困難なのではないだろうか。

そこで本演習では、様々な分野におけるリスク（①大地震・大津波・火山噴火などの非日常的自然災害、②台風・大雨などの日常的自然災害、③新型インフルエンザなどの感染症、④通貨危機や金融危機などの経済的危機、⑤テロリズムなどの公安上の危機および⑥リスク管理の反作用と副作用を横断する対応策を、「リスク回避」、「リスク移転」、「リスク低減」、「リスク分散」および「リスク保有」など、一定の様式に従って整理することを目標におく。

2 使用言語

日本語

3 運営方法

人数によって変わる場合もあるが、現段階では以下のように考えている。

政策構想演習Ⅰ（前期）は数冊のテキストを輪読する。知識の共通化をはかることが目的である。

政策構想演習Ⅱ（後期）はそれぞれのリスクについて研究する。できれば3、4の分野に集約して斑のようなものをつくりたい。

4 テキスト・参考文献

政策構想演習Ⅰ（前期）で用いるテキストについては追って連絡する。

5 受講生に望むこと

輪読するするテキストはすべて読む。

開講までに自分が研究したいと思うリスク分野を決めておくこと。

6 集中セミナー開講の有無

無